

大野窪遺跡

中央自動車道談合坂サービスエリア下り線
改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1992. 3

上野原町教育委員会
日本道路公団東京第三管理局

大野窪遺跡

中央自動車道談合坂サービスエリア下り線
改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1992. 3

上野原町教育委員会
日本道路公団東京第三管理局

巻頭図版



上空から見た大野塚遺跡



寛政年間の野田旅宿絵図（「甲州道中分間延絵図」より）

発刊に当たって

昭和62年5月、中央自動車道談合坂サービスエリア改築に伴い、道路南斜面の上野原町野田尻字天郷・大野窪の掘削が決まった。県文化課では事前に埋蔵文化財の調査を実施したところ、土坑を掘り当て、発掘調査の必要が確認された。早速、日本道路公団より上野原町教育委員会に調査依頼が寄せられ、町教委は発掘調査団を結成の上、平成2年度に約3か月をかけて調査を実施した。この報告書はその「大野窪遺跡」の調査結果をまとめたものである。

もともと、この地帯は「長峰の砦」ほか戦国時代の合戦を物語る遺跡遺構や地名が多い。又、北側には甲州街道の「野田尻宿」もあって、郷土史愛好家の心を引きつける土地がらである。発掘を進めるにつれ、遠くは縄文時代から中・近世までの長期間にわたっての遺構が発見された。この土の上でわれわれの祖先たちは幾世紀にもわたって、様々なドラマを展開してきたことが明らかになったのである。平和な団欒の日々もあったろうし、壮絶な戦いの日々もあったことと思われる。調査結果を読み進めながら先人の暮らしのあとを偲び、人間にとっての真の幸福を問い合わせていただければ幸いである。

終わりに臨み発掘に当たったすべての方々、編集製本に苦労された方々に心からの敬意と謝意とを表すものである。

上野原町教育委員会

教育長 井上武寛

例　言

- 1 本書は、山梨県北都留郡上野原町野田尻字天郷・大野窪地内大野窪遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、中央自動車道談合坂サービスエリア（下り線）改築工事に伴う事前調査で、日本道路公団東京第3管理局の委託を受けて実施された。
- 3 発掘調査は、大野窪遺跡発掘調査団が実施した。その組織は後述の通りである。
- 4 本報告書の執筆・編集は、小西直樹が行った。
- 5 本報告書にかかわる出土品、記録図面等は一括して上野原町教育委員会が保管している。
- 6 発掘調査及び整理作業にあたっては以下の方々のご指導、ご協力を賜った。
山梨県文化課、田代孝、田中悟道、平和中学校、西光寺、小俣喜一（順不同）

大野窪遺跡発掘調査団　名簿

團長 中村律太郎（町文化財審議会々長）

副團長 田中久弥（町文化財審議委員）

調査主任 小西直樹（町教育委員会社会教育課）

經理事務 和田正樹（町教育委員会社会教育課）

会計監査 細川波男、奈良典子（町役場職員）

参加者 和智幹一、荒井 泉、安藤盛平、弦切喜一、山下芳信、尾形唯芳、尾形寿男、尾形トヨ子、志村吉子、高木秀保、河内 愿、久島清正、岡部 黒、久島富江、久島照江、久島勝美、矢崎君博（一般）、松井基幸、堀越隆浩、伊藤 孝、閑屋延行、中尾正弘、今 陽子、早川初美、折原尚子、長野朋水、小山田美和、土橋美和、西林千枝、武井教子（都留文科大学考古学研究会）、山口恵子、古根村典子、清水峰子、小俣笑子、水越桂子、小俣道子（整理作業員）

凡　例

- 1 遺構の縮尺は、集石1/30、土坑・小穴1/40である。
- 2 遺物の縮尺は1/3である。ただし、古錢・弥生式上器片は原寸大である。
- 3 土層図、断面図の「 」といった数値は、標高を表す。

目 次

発刊に当たって

例言

第I章 調査にいたる経緯.....	1
第II章 遺跡の位置と周辺の環境.....	1
第1節 地理的環境.....	1
第2節 周辺の遺跡.....	1
第3節 大野窪遺跡の歴史的環境.....	3
第III章 調査の方法と経過.....	9
第IV章 遺跡の層序.....	10
第V章 遺構と遺物.....	12
第1節 遺構.....	12
1 土坑.....	12
2 集石・焼土址・小穴.....	21
3 溝状遺構・小穴群.....	22
第2節 落ち込み.....	22
第3節 遺物.....	22
1 土器.....	24
2 石器.....	24
3 その他.....	26
第VI章 まとめ.....	27

挿 図 目 次

第1図 大野窪遺跡の位置と周辺の遺跡.....	2
第2図 地形と発掘区（A～D地区）.....	5
第3図 C地区全体図（第V層）.....	6
第4図 C地区全体図（ローム層上面）.....	7
第5図 D地区全体図.....	8

第6図	遺跡の層序	11
第7図	土坑	15
第8図	土坑	16
第9図	土坑	19
第10図	土坑	20
第11図	集石・小穴	21
第12図	M-7区落ち込み	23
第13図	出土土器	24
第14図	出土石器	25
第15図	その他の遺物	26
第16図	C地区地籍図（明治31年当時）	27

図版目次

- 巻頭図版 上空から見た大野窪遺跡、寛政年間の野田尻宿絵図
- 図版1 遺跡調査前・後の全景
- 図版2 土坑（1号～6号）
- 図版3 土坑（7・8号）、集石、円形土坑群全景
- 図版4 土坑（9号～12号）
- 図版5 土坑（13号～17号）
- 図版6 小穴、落ち込み、溝状遺構と小穴群、調査風景
- 図版7 出土遺物（土器・石器）
- 図版8 出土遺物（古銭・小刀）

第Ⅰ章 調査にいたる経緯

昭和62年5月11日～12日	県文化課により、遺跡有無の確認調査が実施される。試掘の結果、縄文時代とみられる土坑が確認され、斜面地を中心に本調査の必要性が確認される。
昭和62年6月17日	日本道路公団より、文化庁宛工事届が提出される。
平成2年5月28日	日本道路公団より、上野原町教育委員会宛調査の依頼がある。
平成2年6月14日	上野原町埋蔵文化財調査会が開かれ、発掘調査団が結成される。調査地として、伝長福寺跡地が追加される。
平成2年7月25日	発掘調査団より、文化庁宛発掘届が提出される。
平成2年7月31日～11月10日	発掘調査が実施される。

第Ⅱ章 遺跡の位地と周辺の環境

第1節 地理的環境

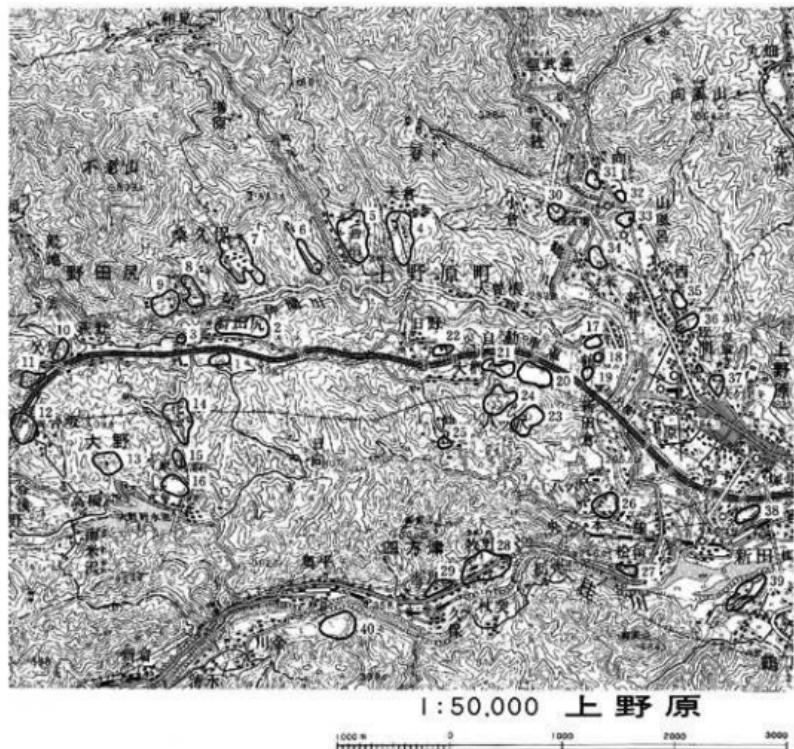
大野塙遺跡は、北都留郡上野原町野田尻字天郷・大野塙に位置する。上野原町は山梨県東端に位置し、東京都・神奈川県と接している。上野原町は、東に小仏山系、西に佐野峠・権現山系、南に遠志・丹沢山系の各山脈で面積の80%近くが占められる。この山々を縫うように西から東へ桂川(相模川)、上野原町を南北に貫流する支流の鶴川があり、流域には河岸段丘地形が断続的に発達している。河岸段丘地形は、山がちな当町にとって重要な生活の場であり、このことは西原・棚原(ゆずりはら)・大野・今野等平坦を表す地名が多いことからも伺える。町内で現在までに確認されている遺跡は、こうした河岸段丘上や山の緩斜面に位置しており、これはまた現在の集落分布とはほぼ一致している。

大野塙遺跡は、鶴川の支流である仲間川・伸山川とに挟まれた東西4、3kmに及ぶ尾根筋に位置している。この尾根は「長峰」と呼ばれ、その南側一帯は伸山川によって開析された支谷が樹枝状に入り組んでおり、一方北側は大門・日野・野田尻といった旧甲州街道沿いの集落を乗せる河岸段丘地形が展開し、急崖をもつて仲間川に接している。

本遺跡は、この長峰の尾根部(A・B地区)、及び北側緩斜面部(C・D地区)に当たる。

第2節 周辺の遺跡

大野塙遺跡の位置する仲間川流域は上野原町でも遺跡が多く分布するところであり、これは河岸段丘の分布とはほぼ一致するものである。



第1図 大野宿遺跡の位置と周辺の遺跡

- | | | | | |
|----------|-------------|----------|-----------|----------|
| 1 人野塚遺跡 | 2 野田尻Ⅰ遺跡 | 3 野田尻Ⅱ遺跡 | 4 大倉遺跡 | 5 芦垣遺跡 |
| 6 潤淵遺跡 | 7 平呂遺跡 | 8 中風呂遺跡 | 9 西不老遺跡 | 10 萩野遺跡 |
| 11 矢坪遺跡 | 12 談合坂遺跡 | 13 木原遺跡 | 14 花坂遺跡 | 15 中尾根遺跡 |
| 16 東大野遺跡 | 17 上野山Ⅰ遺跡 | 18 上野山古墳 | 19 上野山Ⅱ遺跡 | 20 大浜遺跡 |
| 21 南大浜遺跡 | 22 日野富士塚遺跡 | 23 大門Ⅱ遺跡 | 24 大門Ⅰ遺跡 | 25 仲山遺跡 |
| 26 八ヶ沢遺跡 | 27 松留遺跡 | 28 牧野遺跡 | 29 当月遺跡 | 30 小倉遺跡 |
| 31 向風Ⅱ遺跡 | 32 向風Ⅰ遺跡 | 33 山風呂遺跡 | 34 八米遺跡 | 35 西シ原遺跡 |
| 36 大堀遺跡 | 37 上野原小学校遺跡 | 38 関山遺跡 | 39 駒門遺跡 | 40 川合遺跡 |

本遺跡の位置する仲間川右岸では、上野山Ⅰ遺跡(17)・Ⅱ遺跡(19)、大門Ⅰ遺跡(24)・Ⅱ遺跡(23)、大浜遺跡(20)、南大浜遺跡(21)、日野富士塚遺跡(22)、野田尻Ⅰ遺跡(2)・Ⅱ遺跡(3)が点在する。大半の遺跡は縄文時代の遺物散布地であり、なかでも中期が主体を占める。野田尻Ⅰ遺跡は、大野窪遺跡北側一帯の台地に位置する。この台地は、東西0.6km・南北0.3kmの面積を有し、仲間川流域においては日野、大門と並び比較的広大な平坦地となっている。縄文・弥生・平安時代以降の遺物散布地であり、大野窪遺跡との関係が深いと思われる。

本遺跡の東方約1kmには長峰の砦跡が知られている。この砦は、戦国時代、上野原の内城館に本拠をおいて当地域を治めた加藤月後守景忠により築かれたと云われ、仲間川対岸の大倉砦、四方津御前山の砦とともに、甲斐辺境の重要な要塞としての機能を果たしていた。現在この地を中央自動車道が通っているため砦の詳細は明らかでないが、付近には陣門・出口・殿の井戸といった小字名が残っている。本遺跡の西方約1kmに位置する矢坪坂の古戦場は、享禄3年(1530)、相模国の北条氏綱の軍勢と甲斐小山田氏の軍勢が戦ったところと言われる。

仲間川左岸では、大倉遺跡(4)、芦垣遺跡(5)、瀬淵遺跡(6)、平呂遺跡(7)、中風呂遺跡(8)、西不老遺跡(9)がある。いずれも縄文時代の遺物散布地であり、住居址の発掘調査例が2例知られる。大倉遺跡は、昭和53年の発掘調査で中期末葉の埋甕を持つ敷石住居址1軒、竪穴住居址1軒が確認された。平呂遺跡は、昭和48年、円形竪穴住居址が発掘調査され、中期中葉勝坂期の土器片が出土した。

第3節 大野窪遺跡の歴史的環境

本遺跡北側には野田尻宿がある。江戸時代、甲州街道の宿場であり、日本橋から20里12町余に当たる。天保14年の宿内人別607(男313、女294)、宿内家数118。本陣、脇本陣が宿の中ほどに各1軒あり、旅籠尾は9軒。養蚕・機業を主業としており、その様は“おほかた家ごとに煤払いするほどなり、さと人のかたらふをきけば、これを蚕はきといふといへり”¹²と記されるほどであった。野田尻宿と本遺跡とは現在中央自動車により分断されているが、地形的には一続きであり、本遺跡を考える上で野田尻宿の存在は重要である。

宿場西端に熊野山西光寺がある。臨済宗建長寺派で近隣諸村に末寺8ヶ寺を持つ。天長元年(824)、真言宗として建立され、町内最古の寺院とされている。

今回調査対象のA地区は、長峰山長福寺の跡地と伝えられる場所である。長福寺は西光寺の末寺であり、上野原町誌では修験との関連で論考されているが、詳細については不明な点が多い。この場所は調査開始時点において畑地と荒地が広がる平坦地であり、東端には小さな祠を乗せた塚状の高まりがあった。土地所有者の話によれば、先代の明治時代頃には社叢があり、社に通じる坂は「みどうさか」と呼ばれていたそうである。社については、江戸中期以降の各種文献に「白山の森」、あるいは「白山権現」として紹介されている。さらに『甲斐国社記・寺

記』中の慶応4年由緒書上帳には長峰山長福寺として次の記述が見られる。

一、御見捨地

当寺之儀者三間四面の觀音堂にして古来より無縁無壇に御座候居住者無御座候以上

一、本尊ハ木仏之正觀世音菩薩にして行基菩薩之作に申伝候

長福寺の遺物として伝えられているものに聖觀音菩薩像1体と、鰐口1口があり、西光寺に保管されている。聖觀音菩薩像は、「甲斐国史」によれば和智馬之助という者が長福寺廃寺後に犬島神社境内の觀音堂に秘仏として収めたとある。一方鰐口は、町指定文化財とされており、次の銘が見られる。

甲陽都留郡長峰の鰐口一口 借十方壇部施力以鑄之

大永五祀乙酉八朔願主精満觀進沙門宝

なお、塚状の場所では、叩くと音が響くため地下室のようなものがあるのではと地元の噂があったそうで、その真偽については確かめられなかったものの、現代にいたるまで地域の信仰の場として神聖視されてきたことが伺えよう。

なお、昭和42年中央自動車道工事の際、本道路の位置する字天郷で多量の炭を底面に伴う落ち込みが¹1基発見され、
上野原町誌では“地下式土壙古墳”²とされている。



長福寺の鰐口

註1 十返舎一九編の「甲州道中金之草履」には次のような記述がある。

“越川より奴多尻へ一里五丁の間、山道なり。これを永峯とて
山の峰をゆく道にて、見はらしの景色いたってよし。とこ
ろ々に出茶あり。(中略)

田春の日の永峯どぶりこのけしき ちよのいのちをのぶるつ
る川”

註2 「並山日記」嘉永3年(1850)

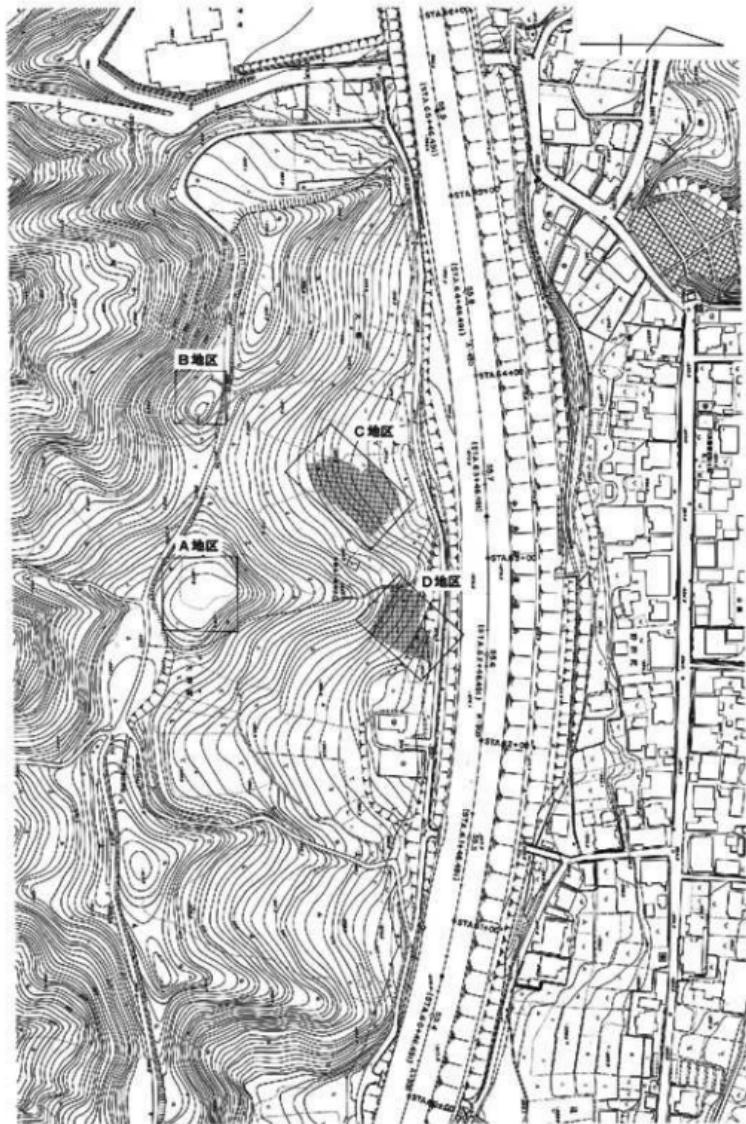
註3 「甲州道中分間延絵図」寛成年間(1789~1801)編集。

「甲斐国史」

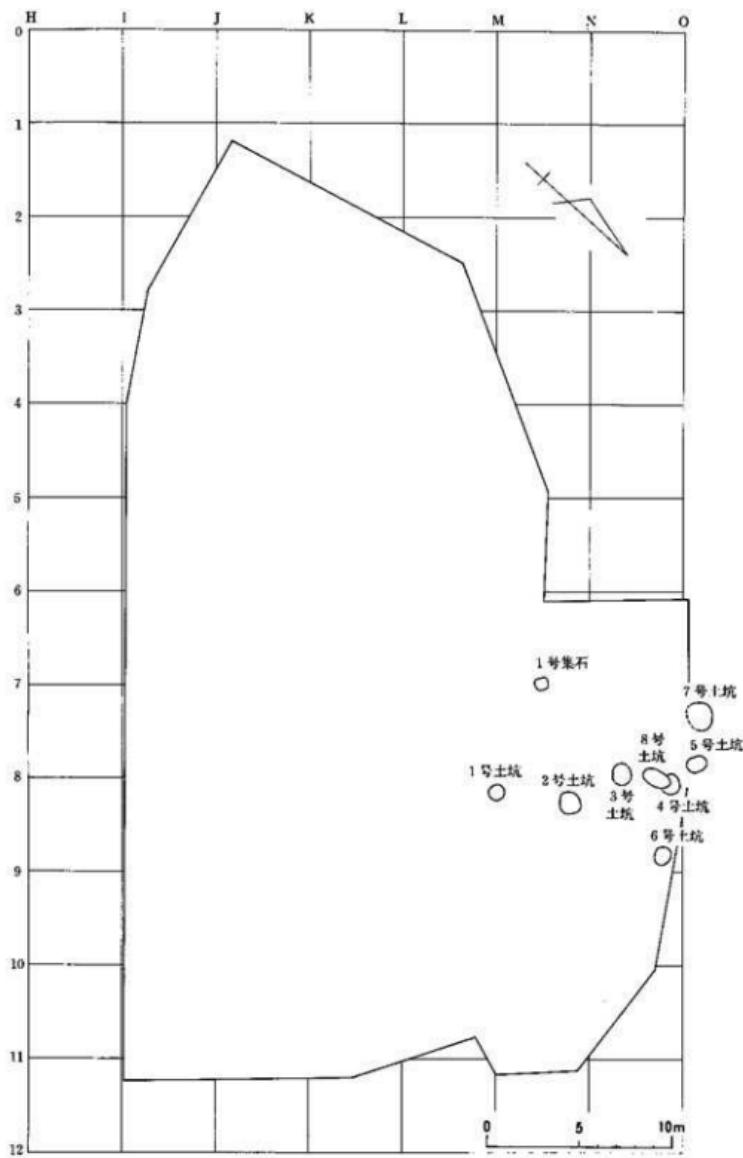
註4 「上野原町誌(上)」



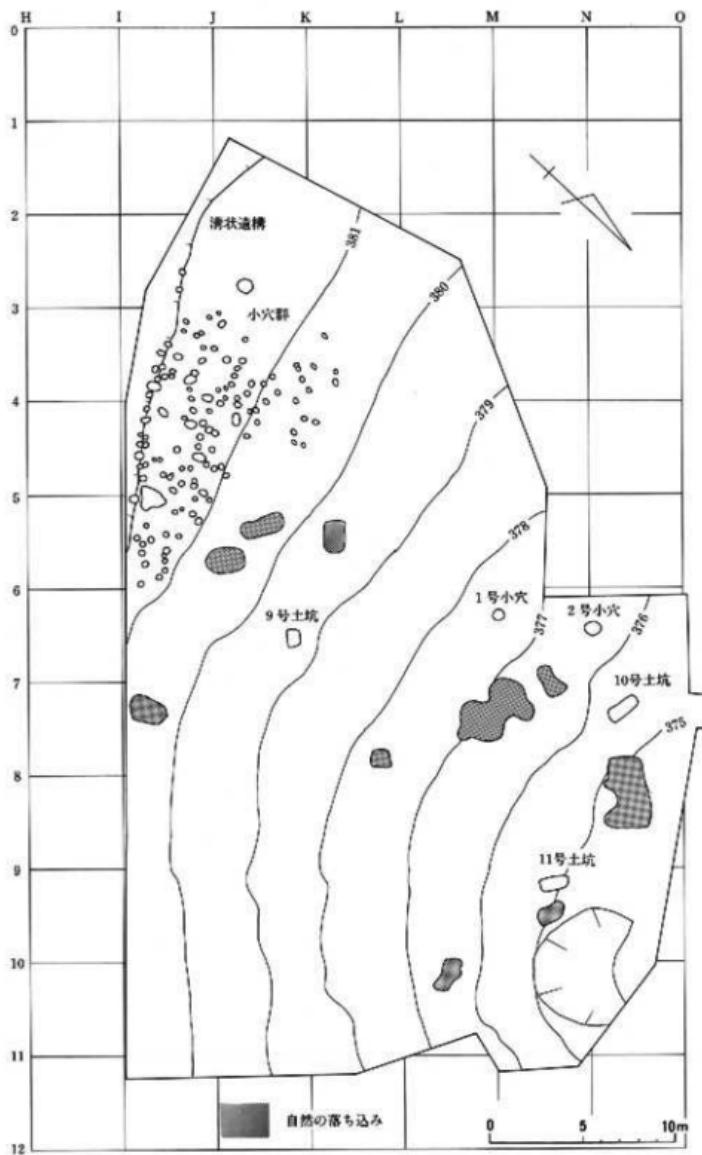
地下式土壙発見状況



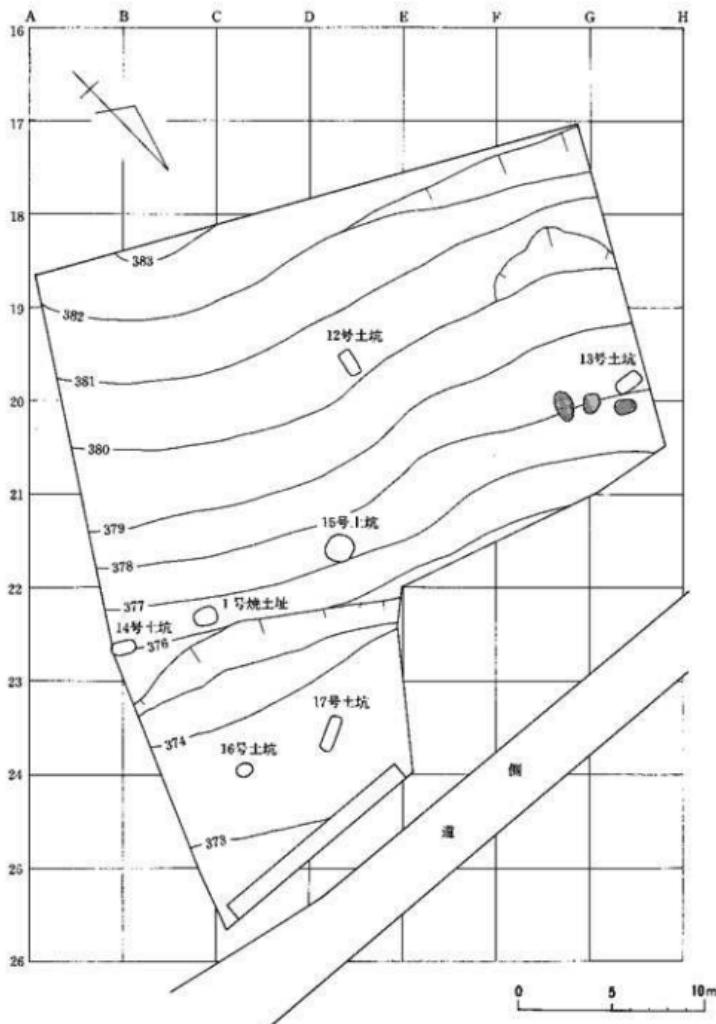
第2図 地形と発掘区（A～D地区）



第3図 C地区全体図（第V層）



第4図 C地区全体図（ローム層上面）



第5図 D地区全体図

第III章 調査の方法と経過

7月31日よりA・C・D地区の試掘調査を開始した。A地区では、頂部平坦地を中心に2m幅の試掘溝を南北を基軸にして設定したが、遺構・遺物が確認されなかったため3日間で調査を終了した。C・D地区では、県文化課の試掘調査により、ローム層上面で陥穴状土坑が確認されていたが、上層観察のため2m×2mの試掘溝を任意に設定し振り下げた。この結果、遺物等は出土せず、表土層が斜面下方に向い1m前後の厚さで堆積していた。

8月9日よりC地区から本調査を開始した。調査に当たっては、試掘調査の結果を踏まえ表土層から第III層中まで重機により掘削することとしたが、V層上面付近で円形土坑が多数発見されたため掘削を中止、8月中旬から下旬にかけて、都留文科大学考古学研究会の夏季合宿による応援を得て、この円形土坑群の調査に当たるとともに、無遺構の場所については人力による振り下げを平行して行った。振り下げは、斜面地形に沿って東西南北に設定した上層観察用の畔を残して実施したが、V層中の遺物は皆無であった。

9月上旬には上層観察用の畔を除去してローム層上面での精査に移った。この結果、多数の黒色の落ち込みを確認し、9月中旬からこれら遺構の検出を開始した。当初の予定では、この遺構検出と平行してD地区の表土剥ぎを行う予定であったが、排土置場がなかなか確保できなかつたうえ、たび重なる降雨や台風により、表土剥ぎが完了して人力による振り下げが開始されたのは10月上旬になってからであった。また、この間にはC地区がたび重なり冠水し、その対応に追われた。これ以降、天候に恵まれ調査は順調に進み、10月31日までには両地区的遺構検出は終了し、遺跡の航空写真を撮影した。この間、B地区の試掘調査を行ったが遺構等は発見できなかつたため3日間で調査を終了した。11月に入り遺構の実測作業を開始、11月9日までに遺跡全体図を作成、調査を終了した。

なお、各地区の調査面積はつぎのとおりである。

総面積 2,740m²

A地区 90m²

B地区 50m²

C地区 1,500m²

D地区 1,100m²

第IV章 遺跡の層序

A・B地区 両地区とも尾根の頂部に位置し、表上直下が地山となる。A地区の平坦部では表土層が厚さ10cm前後であり、地山由来の小礫が多く含まれる。地山は、ローム層、およびローム層下の疊層が露出する。B地区の地山は、ローム層である。

C・D地区 A地区北側の緩斜面地に位置し、小尾根を挟む。概ね次の土層が確認できた。

第I層 表土層である。粘性、しまり弱い。草木の根が多く混じる。C地区では乾燥すると細かい亀裂が多く生じる。D地区では耕作上で粒子が細かい。本道路で出土する大半の遺物は本層に含まれる。

第II層 暗褐色土 I層とIII層の混合層であり、部分的に堆積する。

第III層 黒褐色土 粘性、しまり弱い。炭化粒（1mm～5mm大）を少量含む。円形土坑覆土の基調となる層である。

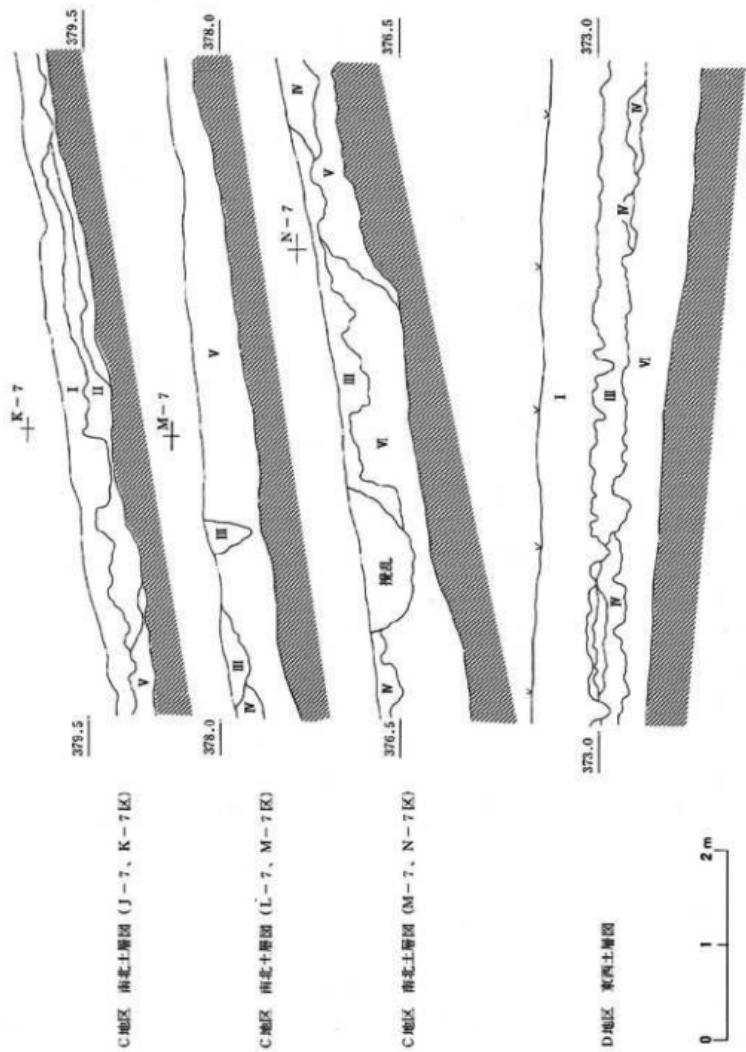
第IV層 暗褐色土 第III層との境は不明瞭であるが、乾燥すると細かく亀裂を生じる他、第III層と比べて黒色味が薄く、粘性がある。炭化粒（1mm～5mm大）を少量含む。

第V層 暗褐色土 スコリア粒（1mm～5mm大）を多く含む。第VI層とともに遺跡地内に広範囲に認められる。

第VI層 黒褐色土 第V層が斜面下方で粘土化したものと考えられる均質な層である。第V層との境は不明瞭であり、スコリア粒（1mm～5mm大）を多く含む。

第VII層 黄褐色土 ローム層である。遺跡地内に広範囲に認められる。

斜面上方では、第I層下がローム層であり、下方へいくにつれ堆積層は厚くなる。地山はローム層であるが、D地区斜面上方の一部でローム層下の疊層が露出する。土層図を第6図に示すが、C地区では表上を掘り下げた後に図面を作成したため、表土層が欠落している。



第6図 遺跡の層序

第V章 遺構と遺物

第1節 遺構

1 土坑（第7図～10図）

上坑は、C地区で11基、D地区で6基の総数17基が確認できた。平面型などから次の3類型に大別できる。

第1類型 平面橢円形である。8号土坑のみである。

第2類型 平面円形を基調とし、いわゆる「円形土坑」と呼ばれる類に含まれる。8基（1号～7号、15号土坑）が該当する。

第3類型 平面長楕円形を呈し坑底に小穴を持つ。坑底施設によりさらに細分が可能である。「陥穴状上坑」に相当する。8基（9号～14号、16号、17号土坑）が該当する。

確認面は第1・2類型が第V層中（15号土坑のみローム層上面）、第3類型がローム層上面である。分布状況をみると、第2類型は15号土坑を除きC地区の斜面下位の谷部をめぐるよう集中するのに対し、第3類型は斜面地に広範囲に散在している。

覆土は、第1・2類型が第III層を基調としているのに対し、第3類型は第V層ないしはVI層が基調となっている。

遺物は、8号土坑の底面直上で礫器が1点出土した他、6号土坑の底面直上で小刀が1点出土したのみである。

時期は、出土遺物が少ないため確証に欠ける。第1類型は、出土した小刀や覆土の状況から中世から近世と考えられる。第2類型は、4号土坑と8号土坑の切り合い関係から第1類型に先行するものであり、古代から中世に該当するものと推定される。第3類型は掘り込み面がローム層上面付近の可能性が高いことや覆土の状況、および17号土坑出土の礫器から縄文時代と推定される。

以下、各土坑の説明を行なう。なお、土坑底面における小穴の深さは、底面からの計測値を示している。

1号土坑

位置 C地区M-8区。

形態 平面円形。

規模 上端92cm×85cm、深さ14cm 下端67cm×67cm

施設 無し。

遺物 無し。

2号土坑

位置 C地区N-8区。

形態 平面円形。

規模 上端110cm×95cm、深さ53cm 下端92cm×75cm

施設 無し。

遺物 無し。

3号土坑

位置 C地区O-7区。

形態 平面円形。東壁はオーバーハングする。

規模 上端110cm×108cm、深さ40cm 下端110cm×105cm

施設 無し。

遺物 無し。

4号土坑

位置 C地区O-7区。

形態 平面円形。南側を8号土坑で切られる。

規模 上端110cm×(110)cm、深さ35cm 下端直径約92cm

施設 無し。

遺物 無し。

5号土坑

位置 C地区P-7区。

形態 平面梢円形。壁はオーバーハングする。

規模 上端104cm×78cm、深さ30cm 下端70cm×50cm

施設 無し。

遺物 無し。

6号土坑

位置 C地区O-8区。

形態 平面円形。発見が遅れたため壁はほとんど残存しない。

規模 上端77cm×75cm、深さ 6 cm 下端56cm×45cm

施設 無し。

遺物 無し。

7号土坑

位置 C地区P-7区。

形態 平面楕円形。

規模 上端150cm、深さ 35cm 下端110cm

施設 無し。

遺物 無し。

8号土坑

位置 C地区O-7区。

形態 平面楕円形。

規模 上端135cm×70cm、深さ 55cm 下端80cm×75cm

施設 無し。

遺物 底面直上で小刀 1点が出土した。水平に置かれた状態であり、刃部は北側を向く。

9号土坑

位置 C地区K-6区。

形態 平面楕円形。

規模 上端115cm×66cm、深さ 50cm 下端95cm×40cm

施設 底面東寄りに小穴が 1孔ある。平面は20cm×30cmの楕円形であり、深さは60cmである。

遺物 無し。

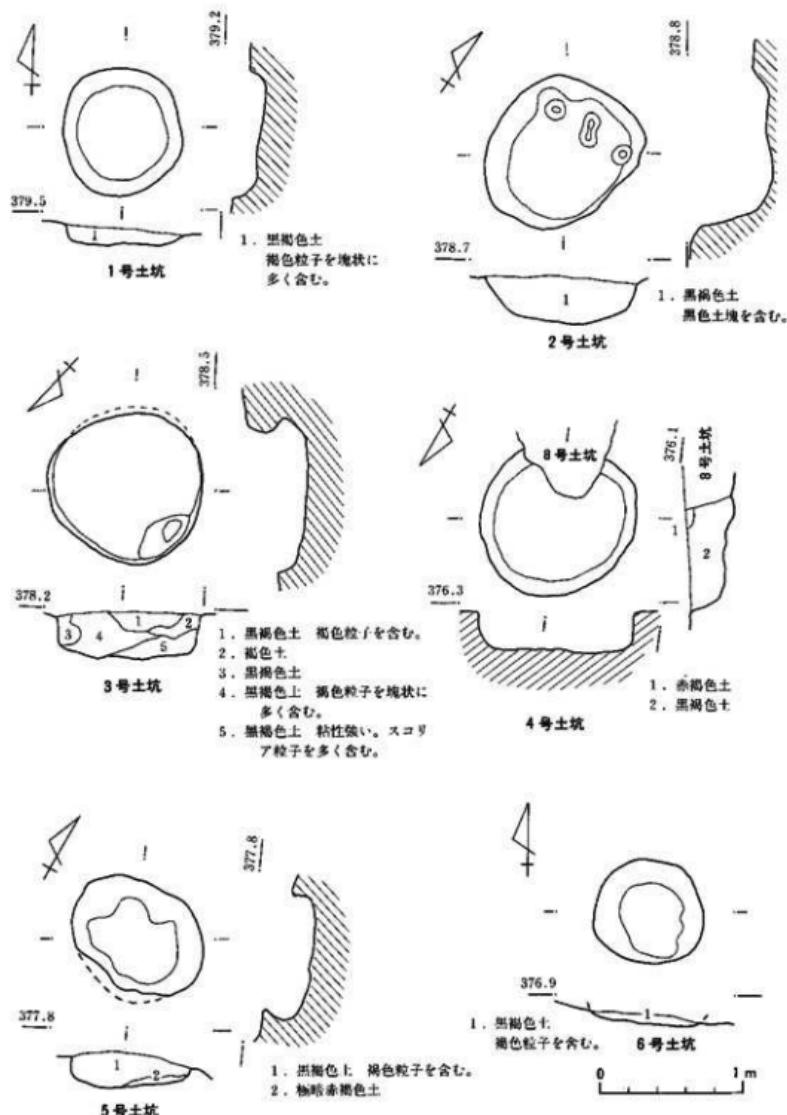
10号土坑

位置 C地区O-7区。

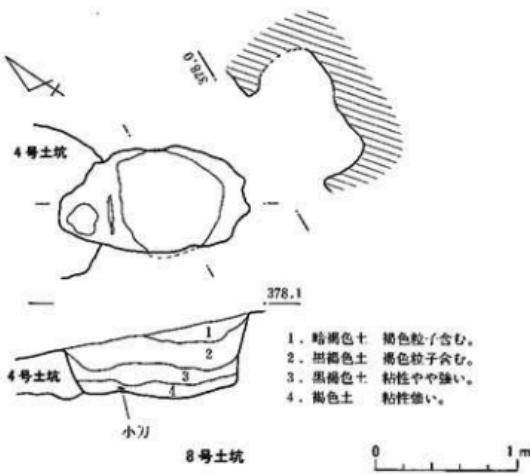
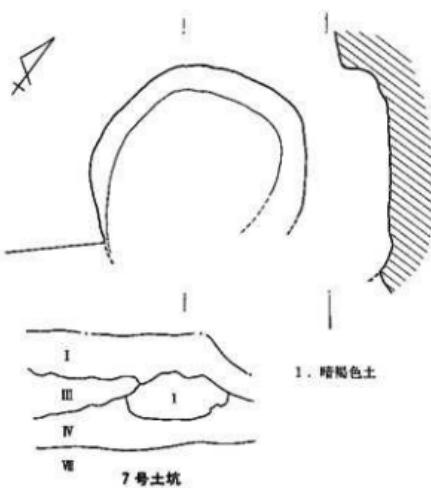
形態 平面長楕円形。

規模 上端186cm×60cm、深さ 75cm 下端155cm×34cm

施設 底面長軸沿いに小穴が 2孔(P1, P2)ある。いずれも平面は円形であり、P1は直径15cm、深さは25cm、P2は直径10cm、深さ 8 cmである。



第7図 土坑



第8図 土坑

遺物 無し。

11号土坑

位置 C地区N-9区。

形態 平面長楕円形。

規模 上端165cm×65cm、深さ90cm 下端115cm×42cm

施設 底面中央に小穴が1孔ある。平面は直径23cmの円形、深さは30cmである。

遺物 無し。

12号土坑 試掘調査時に確認された土坑である。

位置 D地区E-19区。

形態 平面長楕円形。

規模 上端130cm×50cm、深さ60cm 下端13cm×30cm

施設 底面に小穴が2孔（P1, P2）ある。平面はいずれも長方形であり、50cm×30cm、深さ15cmである。

遺物 無し。

13号土坑

位置 D地区H-19区。

形態 平面長方形。

規模 上端150cm×65cm、深さ60cm 下端120cm×50cm

施設 東壁直下に小穴が2孔（P1, P2）ある。いずれも平面円形であり、P1は直径15cm、P2は直径12cm、深さはいずれも5cmである。

遺物 無し。

14号土坑

位置 D地区B-22区。

形態 平面長楕円形。

規模 上端143cm×70cm、深さ35cm 下端125cm×50cm

施設 底面に小穴が2孔（P1, P2）ある。P1は底面ほぼ中央に位置し、平面30cm×25cmの楕円形、深さ15cm、P2は壁際に位置し、平面直径10cmの円形、深さ8cmである。

遺物 無し。

15号土坑

位置 D地区E-21区。

形態 平面不整円形。

規模 上端155cm×135cm、深さ50cm 下端110cm×72cm

施設 底面壁際に小穴が1孔ある。平面45cm×35cmの楕円形であり、深さ5cm程度である。

遺物 無し。

16号土坑

位置 D地区E-23区。

形態 平面楕円形。

規模 上端92cm×65cm、深さ60cm 下端73cm×48cm

施設 底面に小穴が2孔（P1, P2）ある。P1は底面中央に位置し、平面は直径20cmの円形、深さ12cm、P2は既際に位置し、平面は直径10cmの円形、深さ5cm程度である。

遺物 北壁沿いの覆土下層より碟器が1点出土した。

17号土坑

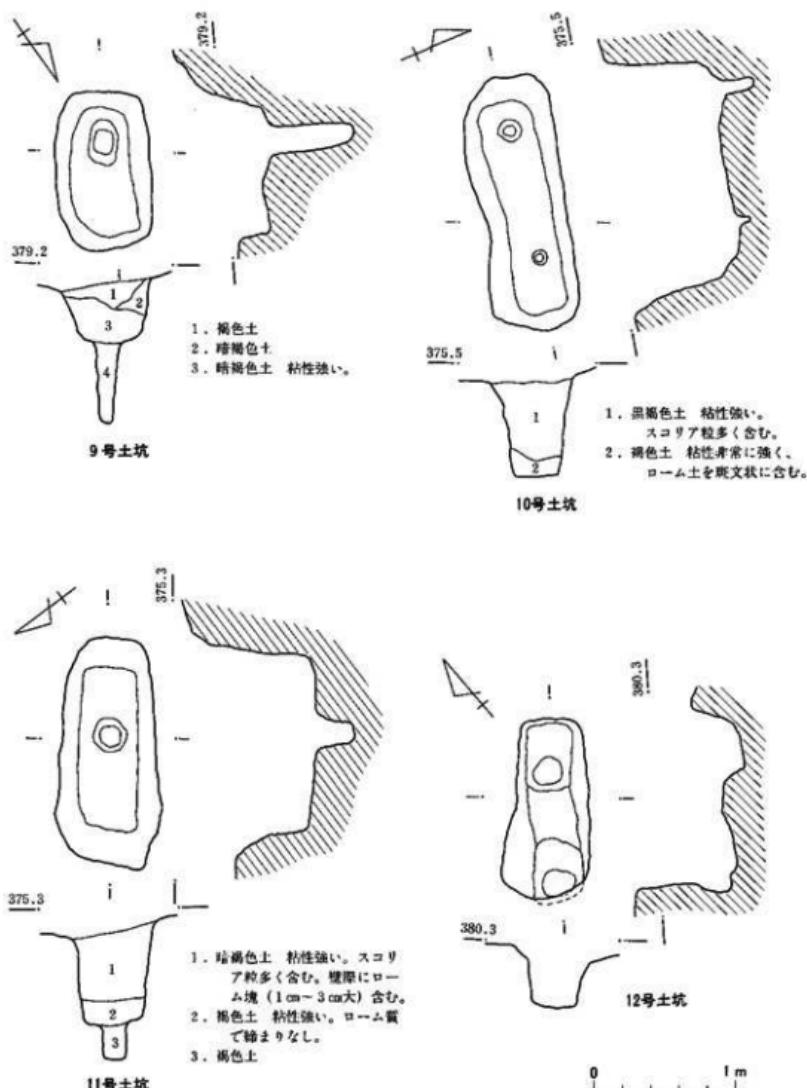
位置 D地区D-23区。

形態 平面長楕円形。

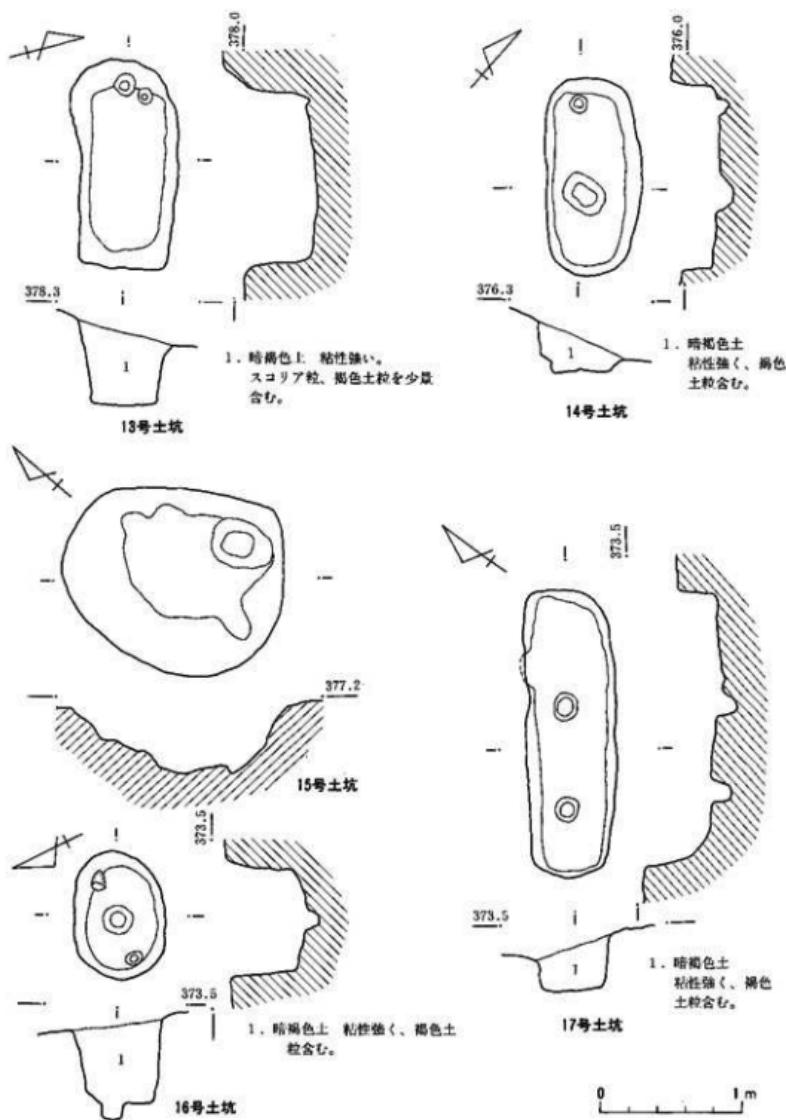
規模 上端205cm×65cm、深さ50cm 下端190cm×50cm

施設 底面長軸に小穴が2孔（P1, P2）ある。いずれも平面は直径15cmの円形、深さ15cmである。

遺物 無し。



第9図 土坑



第10図 土坑

2 集石・焼土址・小穴（第II図）

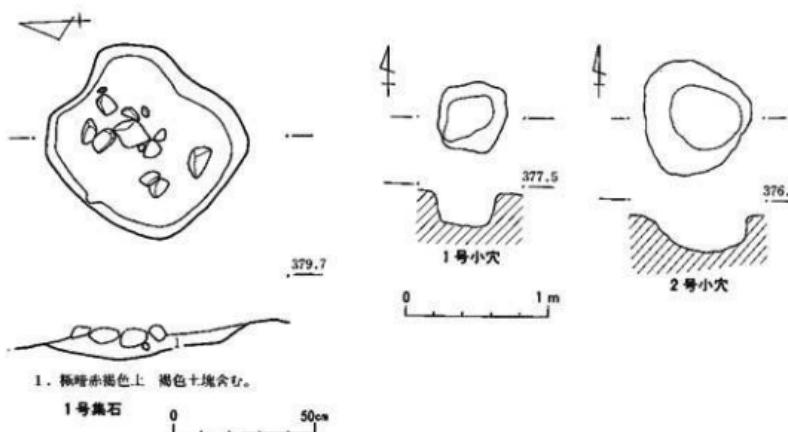
集石 C地区、第V層中で1基発見された。N-7区に位置する。一边60cmの不整方形となる掘り込みを持ち、確認面からの深さは10cmである。覆土は第V層に相当する単層で、炭化粒の混入は認められない。集石を構成する礫は、総数14個であった。熱を受け赤化、あるいは破碎している様子は認められない。出土遺物はない。

焼土址 D地区、ローム層上面で1基発見された。C-22区に位置する。平面は直径60cmの円形であり、深さ10cmである。中央部に、焼土粒子がやや多く混入する第V層相当層が堆積しているため、平面では焼土範囲が輪状に見える。出土遺物はない。

小穴 C地区、ローム層上面で2基発見された。覆土は第V層に相当する。

1号小穴 M-6区に位置する。平面は一边45cmの不整方形であり、深さは25cmである。

2号小穴 N-6区に位置する。平面は80cm×70cmの不整円形であり、深さは30cmである。



第II図 集石・小穴

3 溝状造構・小穴群（第4図）

溝状造構

C地区、ローム層上面で1条発見された。幅は150cmから200cmである。段地形に沿って延びており、さらに東西に続くようである。17mにわたり発掘した。深さは10cmから20cmである。北側上端に沿って小穴が並んでおり、平面は直径20cmから60cmにかけての円形である。本造構に伴う施設と考えられる。覆土は第I層相当層である。出土遺物は近代以降の陶器破片、瓦片が少量である。

小穴群

溝状造構の北側に位置する。表上例ぎの後ローム層上面を精査したところ、16m×11mの範囲に集中して発見された。各小穴の平面は直径10cmから70cmの円形、もしくは椭円形を呈し、とくに直径20cm程度のものが多い。深さは10cmから20cmである。配列に規則性は認められないが、溝状造構に沿って並ぶ小穴と形態、覆土、出土遺物がほぼ一致することから、あるいは溝状造構と一帯となったなんらかの機能を有していたとも考えられる。覆土は第I層相当層であり、1cmから2cm程度の炭化物をやや多く含んでいる。出土遺物は、近代以降の瓦片が少量出土したのみである。

第2節 落ち込み（第12図）

本遺跡からは多数の落ち込みが確認された。規模は、4mを越える大型のものと50cm前後の小型のものに分けられる。確認面は、第V層中とローム層上面とに分けられる。分布はC地区谷部の縁辺に偏在しており、大型の落ち込みは斜面下位にある。いずれも壁と床面との差が不明瞭であり凹凸が激しい。覆土中にローム塊を含むものが多く、出土遺物は無い。以上の点から、先述した造構とは明らかに様相を異にしており、その成因は不明ながらも自然營力による落ちこみと考えるのが妥当と思われる。ここでは、M-7区の落ち込みを図示し、他は全体図に示すにとどめる。

第3節 遺物

本遺跡からの出土遺物は極めて少なく、大半がC地区の第I層から出土した。なお、第I層からは近・現代と考えられる陶磁器片が20点出土した。陶磁器では、磁器の碗が大半であり、他に陶器製の灯明具がある。いずれも小片が多いため本稿では割愛する。（図版7）。以下、地主の小保喜一氏の表探資料を含め報告する。



1. 暗褐色土 第V層に相当する。
2. 黄色土 ローム粒子を塊状に含む。
3. 黑褐色土 ローム粒子を含む。
4. 褐色土 ローム質。

第12図 M-7区落ち込み

1 土器 (第13図)

縄文式土器 (1) 深鉢形土器の底部。底部の推定径は約8.0cmで、網代痕が認められる。胎土は砂粒を含む。色調は褐色を呈し、焼成はやや悪い。内面に吸炭が見られる。C地区第I層出土。

弥生式土器 (2) 削部小片である。櫛歯状工具による波状沈線文が認められる。胎土は砂粒を含む。色調は褐色を呈し、焼成は良い。C地区第I層出土。

時期は、1が縄文後期、2は弥生後期に比定できよう。

2 石器 (第14図)

礪器 (1) D地区17号土坑出土。完形。三角状を呈する素材の端部に刃部を粗く作りだしている。

最大長13.0cm、最大幅9.0cm、厚さ4.7cm、重さ540g。石材は砂岩である。

四石 (2) C地区第I層出土。端部を一部欠損する。平滑な両面中央部に、各2孔程度を有する。現存長11.0cm、最大幅7.0cm、厚さ2.9cm、重さ270g。石材は泥質片岩である。

打製石斧 (3~5) 3点の出土であり、いずれもC地区第I層出土。石材は泥質片岩である。

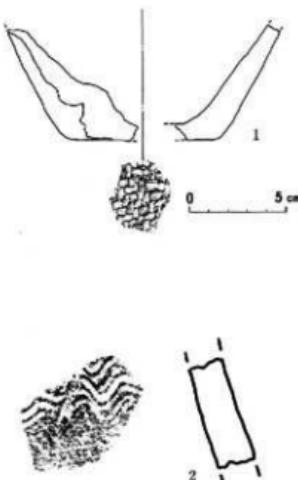
3. バチ形。基部、および刃部の一部を欠損する。現存長9.0cm、最大幅4.5cm、厚さ1.3cm、重さ81g。

4. バチ形。完形。扁平な素材の周縁に、両面からの剥離調整が不鮮明ながら認められる。

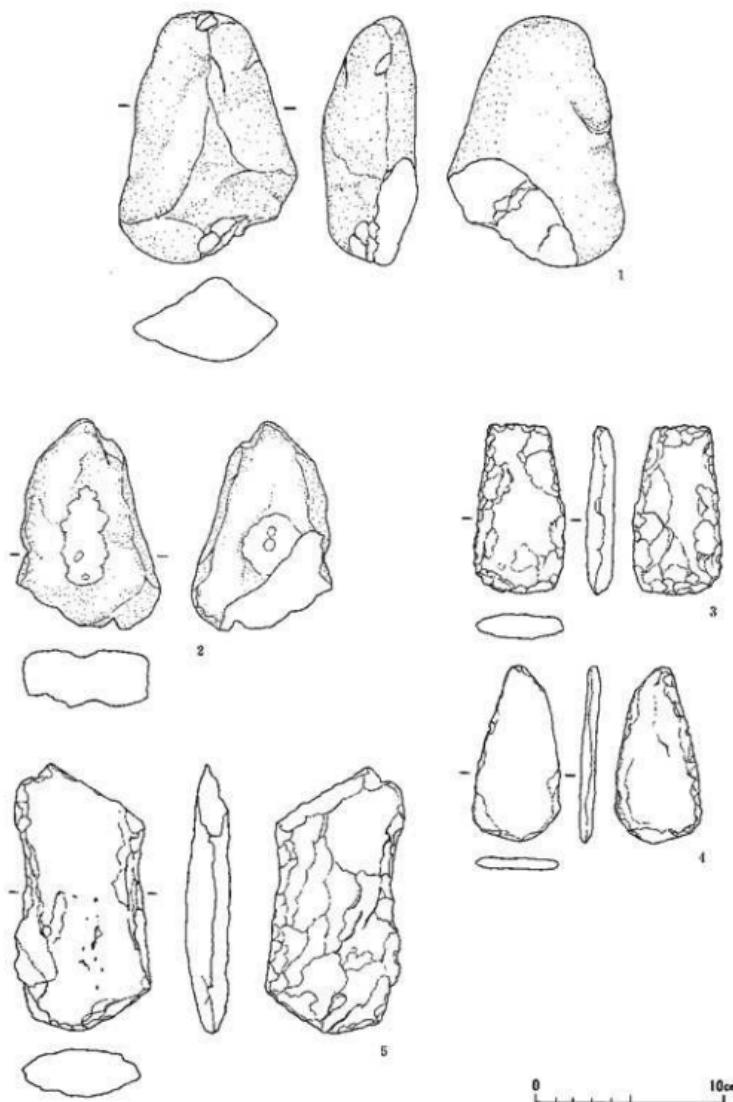
現存長9.2cm、最大幅4.5cm、厚さ0.6cm、重さ37g。

5. 短冊形と言えるが、両側縁はわずかに弯入する。基部の一部を欠損する。粗い剥離調整が施されており、片面は素材面が残っている。現存長14.2cm、最大幅7.0cm、厚さ2.3cm、重さ289g。

この他、黒曜石の小剝片がC地区第I層から数点出土している。



第13図 出土土器

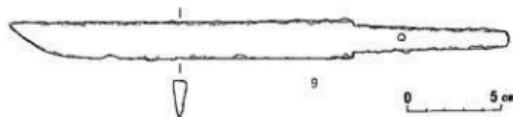


第14図 出土石器

3 その他（第15図）

古銭（1～8）「永樂通寶」（1）がC地区第Ⅰ層から1点出土した。なお、小俣喜一氏のA地区表探資料として「開元通寶」2点（2, 3）、「乾隆通寶」1点（4）、「元祐通寶」1点（5）、「元豐通寶」1点、「聖宋元宝」1点（6）、「寛永通寶」3点（7, 8）があり、併せて報告する。

小刀（9）8号土坑の底面直上から出土した。全体に鏽の付着が見られるが、遺存状況は良好である。茎部には目釘穴が1個見られる。全長26.5cm、刃部の幅2.0cm、茎部長8.2cm、茎部幅1.5cm～0.8cm。刃部の厚さ0.7cm。



第15図 その他の遺物

第VI章　まとめ

本遺跡からは、縄文時代から中・近世にわたる遺構が発見された。遺物は調査面積に比較して極めて少なく、発見された遺構の大半が土坑であることから、住居地域とは一線を画した土地利用が縄文時代から連続と受けられてきたと考えられよう。さらにこのことは、斜面地という地形上の制約の他に、平坦地が住居地として選択されてきた結果とも言える。

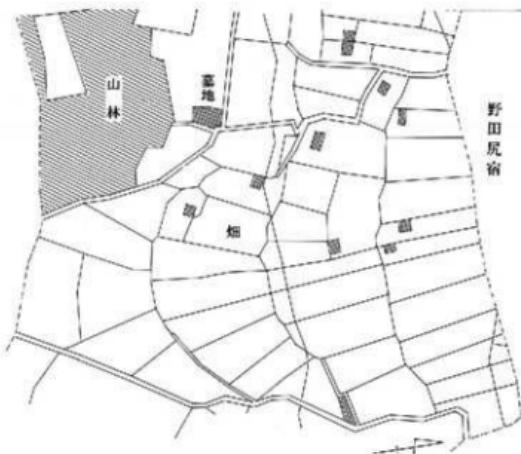
縄文時代では、陥穴と見られる土坑が数基発見された。町内ではこの種の遺構は比較的多く発見されており、仲大寺遺跡、穴沢遺跡、新屋原遺跡、関山遺跡がある。当時の生業活動を考える上で新たな資料が加わったことになる。

弥生時代では、わずかに土器細片が1点出土したのみであるが、同時代の遺物散布地とされる野田尻Ⅰ遺跡との関連が指摘できよう。

古代以降の遺構としては、円形土坑、8号土坑、集石、小穴群と溝状遺構がある。

8号土坑は、形態的特徴や出土遺物から墓壙と考えられる。このことは、周辺に墓地が点在していたことからも裏付けられる（第16図）。造墓時期については、明治19年（1886）、共葬墓地の設置令以降当地において墓の造営が行われていないことや、付近に点在する墓碑が文政年間から天保年間（1818～1841）の銘を持つことから、江戸時代後半に下限を設定できよう。小刀については、「死者を寝かせた枕元や布団の上に刀剣・刺刀・包丁などの刀物を置いて魔除けとする習俗は一般的なもの」とされ、本例も同様な意味合いで副葬されたものと考えられる。なお、付近で地下式土坑の発見が報告されており、本遺構との関連も含め今後検討する必要があろう。

以上、遺構・遺物の数は少なかったものの、その提示する問題は豊富であると言



第16図　C地区地籍図（明治31年当時）

える。

註1) 中世から近世にかけての墓壙は、県内でも多数発見されている。形状としは、横円形もしくは方形を呈し、規模は1m前後のものが多い。また、大半は南北に主軸を持ち、人骨の位置から頭葬北枕が主流である。副葬品は頭から胸にかけて発見されることが多く、古銭の他、小刀や陶磁器、キセル、櫛などの生活用品がある。

参考文献 桜井徳太郎編「民間信仰辞典」1980年

「上野原町誌」

写 真 図 版

図版 1



A 地区調査前全景



A 地区調査後全景



C 地区調査前全景



C 地区調査後全景

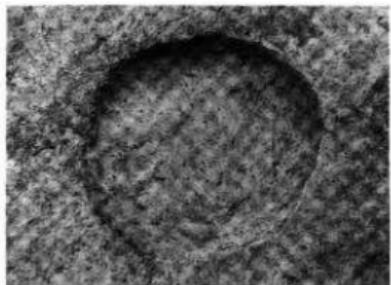


D 地区調査前全景

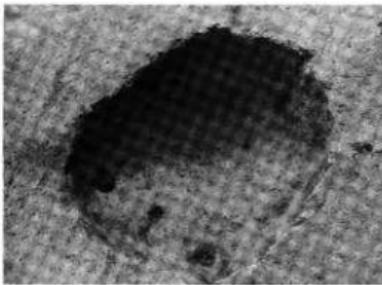


D 地区調査後全景

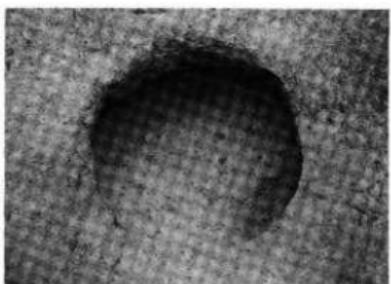
図版 2



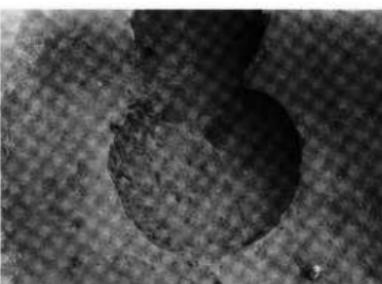
1号土坑



2号土坑



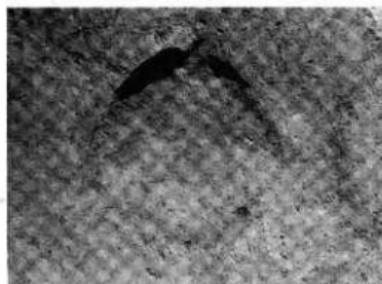
3号土坑



4号土坑



5号土坑

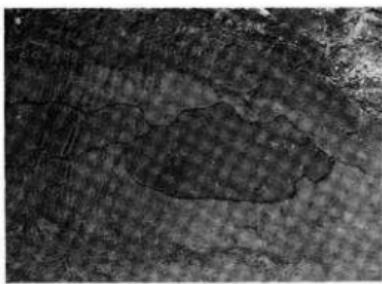


6号土坑

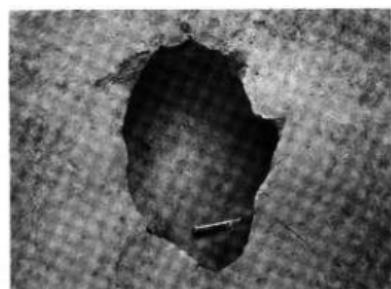
图版 3



7号土坑



7号土坑断面



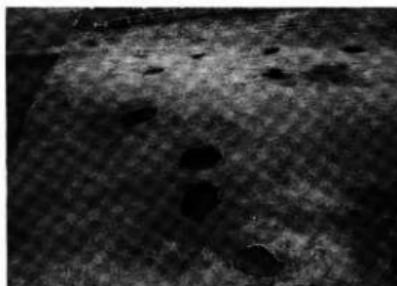
8号土坑



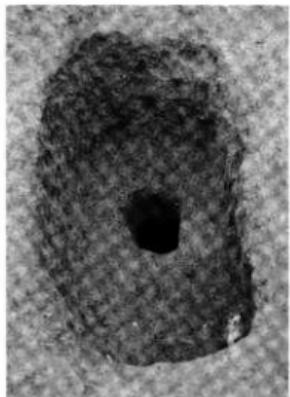
8号土坑小刀出土状况



1号集石



圆形土坑群全景



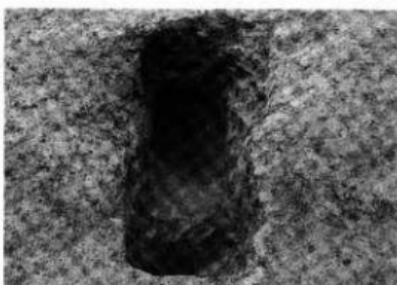
9号土坑



10号土坑

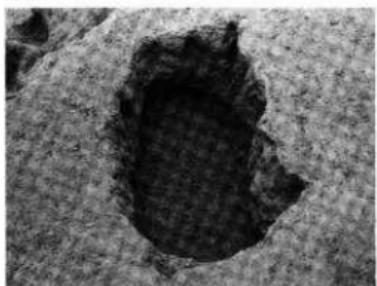


11号土坑



12号土坑

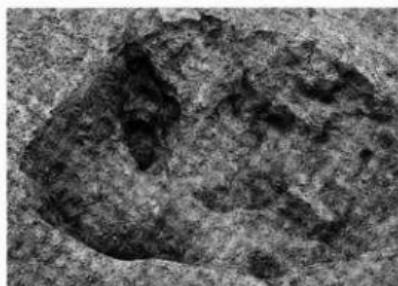
図版 5



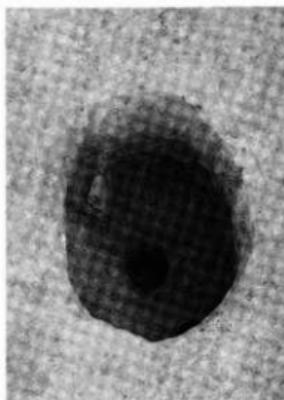
13号土坑



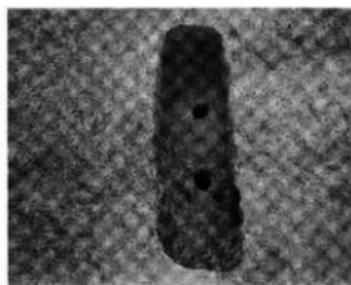
14号土坑



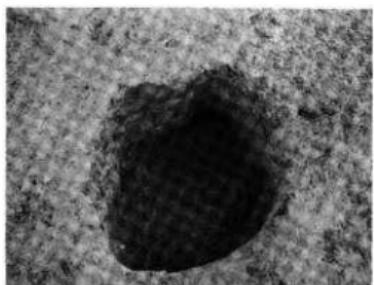
15号土坑



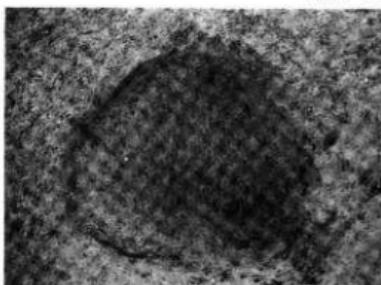
16号土坑



17号土坑



1号小穴



2号小穴



M-7区落ち込み



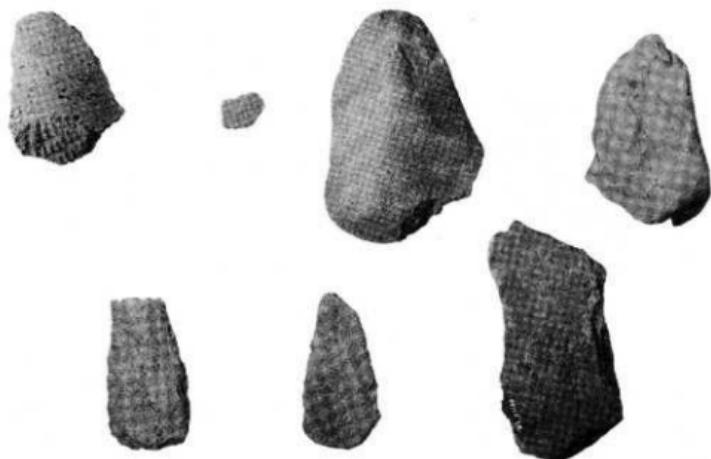
溝状遺構・小穴群



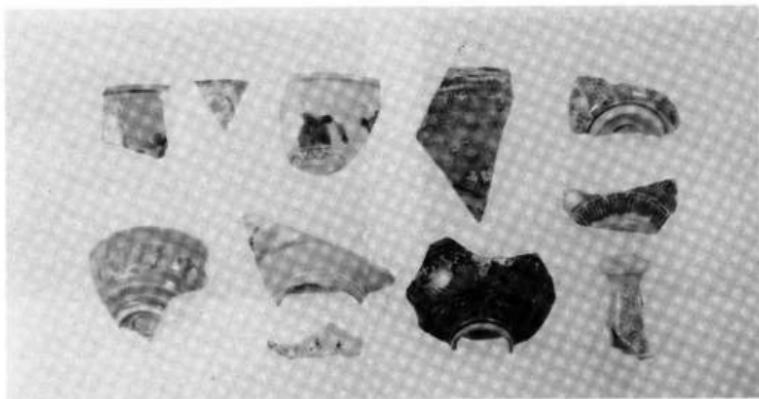
調査風景



調査風景



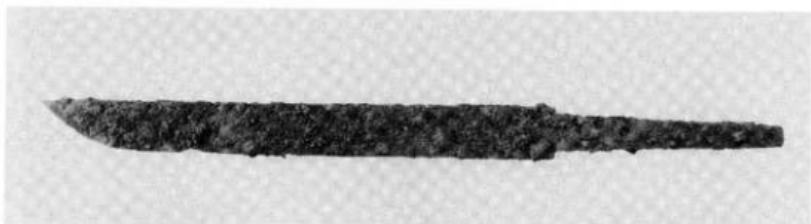
出土土器・石器



出土土器（陶磁器）



(小保喜一氏所藏)
古錢



小刀

大野塗遺跡

平成4年3月31日

編集 大野塗遺跡発掘調査団

発行 上野原町教育委員会

日本道路公団東京第三管理局

印刷 第一法規出版株

